一転パニックに（1995 年 3 月号掲載・古市　嗣夫）

今年はどのような災害が待ち受けているのか、年も空けてまだ 1 月の半ば。その日は午前 3 時半頃発生した須磨管内の火災が鎮火し、係員一同、時々かかってくる救急要請や病院照会に応対していた。

そして運命の午前 5 時 46 分、突然ドーンという音と共に激しく体を揺すられ、管制室がこのまま崩れてしまうのかと思うぐらい南北に揺れ、必死で指令台につかまって体を固定した。

いったい何が襲ってきたのか、なぜこうなるのか訳がわからず、頭の中はパニックに陥った。

揺れが始まり、指令台を見ると各署の指令ランプはすべて点滅して障害発生を示し、同時に西区方面の 119 番が 3 回線ほど着信した。

管制室内は、あらゆる警報音、着信音を発し、119 番は市内全域から次々と着信して数分後にはほとんどの回線が満杯状態になった。まもなく長田から無線で川西通で火災発生、炎上中の報、各署から続々と火災、生き埋めによる応援要請があり、たちまち無線は輻輳した。119 番の多くは家屋の倒壊による生き埋めで、過去に経験したことのない大災害であり、あまりにも発生区域が広範囲で、これら多くの人たちの救助要請の声に応えられず、本来の指令管制業務が崩れ落ちた。